

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.25

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

特集1 文化財レスキュー事業への みなとびあ取り組み	P.2~3
特集2 にいがたの近代建築 —明治・大正・昭和戦前期の建物—	P.4
常設展示室から 「出山での製塩」(模型)	P.5
おすすめの一冊 茶の本	P.5
みなとびあ 研究notes	P.6
館長日記	P.7
収蔵資料紹介	P.7
博物館を支えるモノ・もの	P.8



今年のみなとびあの見頃は、
4月中旬以降になりそうです。

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.25

【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
5月3日(木)~6日(日) 14:00~15:00	GW特別 たいけんプログラム	日替わりでいろいろなプログラムを実施します。 (詳細は右記参照)	不要/無料
5月19日(土)・20日(日) 14:00~15:30	江戸紋切りに ちょうせん	切り絵で伝統的な絵柄 をつくります。	不要/無料
5月26日(土)・27日(日) 14:00~15:30	さらさら砂絵	新潟の砂を使ってかわい い砂絵をつくります。	不要/無料
6月9日(土)・10日(日) 14:00~15:30	ワラから紙を つくろう	ワラから紙をつくって そこにオリジナルの絵を 描こう。	必要 (6月1日必着) 各15名/100円
6月16日(土)・17日(日) 14:00~15:30	【むかしのあそび】 あやとり・竹なごで あそぼう	むかしのあそび体験!! あやとりやたけなごで遊 ぼう。	不要/無料

GW特別たいけんプログラム	
5月3日(木)	14:00~15:00 愛のかぶとづくり
5月4日(金)	14:00~15:00 こいのぼりづくり
5月5日(土)	14:00~15:00 日光写真で遊ぼう
5月6日(日)	14:00~15:00 江戸紋切り

塔屋見学会	
5月6日(日)	10:00~15:00 参加申込不要・無料

普段は入れない、税関の塔屋見学会(ボランティアガイド付き)です。一度に入れる人数に限りがあるため、朝から整理券を配布いたします。参加ご希望の方は、当日税関前の受付へお越しください。

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。
締切は必着です。
プログラムは予定となっていますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在開催中 企画展 にいがたの近代建築 —明治・大正・昭和戦前期の建物—

現存する建物、また、失われたものの中から、新潟市の近代とともに歴史を刻んだ建物を写真で紹介。また、近代建築が歴史遺産として認識されるようになった近年、市民からも建物の保存が望まれるようになりました。こうした保存の動きや、保存され再生を果たした建物もあわせて紹介します。

【会期】2012年4月21日(土)~6月10日(日)

【休館日】4月23日(月)・5月7日(月)・8日(火)・14日(月)・21日(月)・28日(月)・6月4日(月)

観覧料	一般	500円(400円)	()は団体料金
高校生・大学生	300円(240円)		*小・中学生は土日祝日無料
小学生・中学生	200円(160円)		*企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます

関連イベント

(1) 展示解説会 申込不要
毎週日曜日 午後2時から開催(40分程度)

(2) たてもの展講演会
「新潟市の近代建築 —その特色と保存の現状—」
【日時】5月13日(日) 13:30~15:00
【講師】山崎完一氏(元新潟市文化財保護審議委員)
【会場】本館2階セミナー室
■募集人数 80人 ■資料代 100円
■申込締切 4月27日(金)まで

(3) ワークショップ 全2回開催 小雨決行

「失われた近代建築を訪ねる」まちあるき
往時の建物の写真を携え、建物が建っていた現地を訪ね、当時と現在の状況を比較します。

①1回目「榎谷小路・西堀通界隈を訪ねる」
【日時】6月2日(土) 13:00~15:00
【集合場所】クロスバルにいがた 1階ロビー
クロスバルの駐車場のご利用はご遠慮ください。

②2回目「古町・学校町界隈を訪ねる」
【日時】6月3日(日) 13:00~15:00
【集合場所】NEXT21 1階ロビー
■募集人数 各25人 ■参加費 各500円(資料代・保険料)
■要申込み 5月18日(金)まで

【申込方法】
往復ハガキか電子メール・FAXにて、

- ①氏名
- ②住所
- ③連絡先電話番号
- ④参加ご希望のプログラム

をご記入の上、お申し込みください。
応募者多数の場合は抽選いたします。
結果は申込締切後にご通知します。

博物館講座 当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話しします。

時間：13:30~15:00
会場：本館2階セミナー室
申込み：不要。当日受付、定員50人程度
資料代：100円

■第1回目の博物館講座は、5月27日(日)に開催いたします。

次回企画展 開墾の技術史—蒲原平野はどのように開墾されたか—

新潟市周辺に広がる耕地について、考古学、歴史学、民俗学の成果から耕地造成の歴史における開墾の技術を紹介します。

【会期】2012年7月21日(土)~8月26日(日)

【休館日】7月23日(月)・30日(月)・8月6日(月)・20日(月) *8月13日(月)は開館
【観覧料】一般600円(480円) 高校生・大学生400円(320円) 小学生・中学生200円(160円)
()は団体料金 *小・中学生は土日祝日無料 *企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます

みなとびあからのおしらせ みなとびあは燻蒸期間のため、6月18日(月)~25日(月)まで休館します

博物館を支えるモノ・もの 展示台

みなとびあでは開催する企画展ごとに様々な資料を展示しています。それらの資料は形状・材質ともに様々であり、企画の意図を視覚的に表すために、資料にあわせて展示台を使い分けています。また見やすさを考えて、キャプションパネルを展示台に置くこともあります。

展示台には平らなものや傾斜のついたもの、またサイズや高さもいろいろ種類があります。展示台は資料の脇役ですが、資料を直接支え、また展示の印象をも左右する“名脇役”といえるでしょう。



編集後記 「帆檣成林」第25号はいかがでしたか。今年の冬は例年より雪が多く、厳しい冬となりました。みなとびあの敷地にある堀の水も凍るほどの寒さでしたが、ようやく春の訪れが感じられるようになってきました。これから、つつじや新緑の美しい季節となります。企画展をはじめとして、ゴールデンウィーク期間も塔屋見学会や連日のたいけんプログラムなどみなとびあでも様々な催し物がおこなわれますので、皆様どうぞそぞをお運びください。お待ちしております。(並木)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・
新潟市歴史博物館 みなとびあ

住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
TEL:025-225-6111 fax:025-225-6130
E-MAIL:museum@nchm.jp
休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9:30~18:00



帆檣成林「はんしょうせいりん」第25号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷／株式会社博進堂

文化財レスキュー事業への みなとびの取り組み

森 行人

二〇一一年三月十一日の東日本大震災は、被災地域の歴史資料にも大きな被害を与えました。被災した資料を少しでも救い出し、保全して後世に伝える取り組みが進められています。

被災資料の保全活動

東日本大震災の後、甚大な被害の中で関係施設や資料の被災状況を調べることは困難でしたが、様々な団体や機関、個人が被災状況の調査や情報の集約を行い、インターネットなどで情報を発信しました。特に、一九九五年の阪神・淡路大震災以降、被災資料の保全を目的として各地で結成された資料ネットワークが大きな役割を果たしました。被災地での資料の保全活動も始められ、二〇一一年三月三十一日には文化庁が東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）を発表し、全国の機関・団体に支援を呼びかけました。

支援物資の提供

四月に入ると、作業の手順や必要な物資など、保全活動の具体的な状況がネット上で発信されるようになりました。津波や地震を原因とする水害により水損した資料は、劣化の進行を抑制するために、水害を受けた場所から搬出し、作業が可能な場所へ輸送し、洗浄・乾燥作業をして、一時保管します。水損が著しい資料には、真空凍結乾燥処置が必要です。

こうした情報発信を通じて、保全活動に必要な物資や機材、あるいは保管場所などを具体的に知ることができました。そこで、文書箱や段ボール箱、巻ダンボールなど、当館が資料の梱包・輸送に使用している物資を提供する支援を始めました。これは現場の緊急の求めに応じるとともに、規格の揃った資料を提供することが現場への支援になると判断したためです。指定管理者として当館を運営している私たちは、新潟市と協議を行った上で物資提

供の情報を発信しました。支援情報の発信に際しては、支援を要請する団体との連絡を円滑に進めることができるよう、新潟歴史資料救済ネットワーク（以下、新潟資料ネット）に協力を依頼しました。これにより、新潟資料ネット経由で山形文化遺産防災ネットワーク（山形ネット）から支援要請があり、新潟県立歴史博物館（以下、県博）と協力して物資の提供を行いました。この後、茨城文化財・歴史資料救済保全ネットワーク準備会（茨城史料ネット）、岩手県立博物館からも支援の要請があり、県博及び新潟資料ネットと協力し、新潟市文化財センターとも連携して支援を実施しました。

支援スタッフの派遣

文化財レスキュー事業の発表後、中核となる救援委員会が発足し、構成団体の日本博物館協会（以下、日博協）は加盟館を対象に派遣可能な人員の調査を行いました。当館も参加を表明し、六月に入ると日博協経由で文化財レス



長野県栄村での地域史料保全有志の会による文化財保全活動には、新潟資料ネットをはじめ多くのボランティアが参加した。2011年8月

今後の支援へ

文化財レスキュー事業は、緊急の救出・保全活動を要する段階を終えると、避難した資料の帰還と地域での活用を目指す管理体制づくりへと移ります。このような資料を活用可能な状態へと整理する作業には、長く継続的な取り組みが必要となります。たとえば、二〇〇四年の中越地震で被災した旧山古志村の文書資料は、長岡市中央図書館文書資料室と山古志支所、新潟資料ネットにより二〇一〇年度に現地へ返還され、現在も地元の方やボランティアを交えて活用に向けた整理作業が続けられています。

こうした災害時の対応には広域的な支援が欠かせないため、当館もその体制づくりに取り組んでいます。当館は指定管理者制度で運営されているので、まず市と結ぶ協定において、災害時の広域的な連携活動を盛り込むことが必要と考えています。

平時の取り組みへ

新潟県の歴史資料の保存・活用に取り組んでこられた山本幸俊さんは、阪神・淡路大震災の後、被災資料の救援活動に関わる動向を受けて、歴史資料は無媒介に存在するのではなく、地域の人々・地域の行政・地域社会の生活や環境・文化の中に存在していて、地

域社会「【市民】の中で文化財をどう保存し、具体的に生かすかが課題だと指摘しています。地域にある歴史資料を保存し、活用するという活動を、地域住民と具体的、実際に共有することの大切さを述べています（「災害と史料保存」について考える―第八十一回全国図書館大会及び第二十一回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会に参加して―『新潟史学』第三十六号・一九九六年五月）。

このように、歴史資料の保全活動への支援の継続、あるいは今後発生する災害への備えのために、地域社会の中で資料の保存と活用が身近なものとなるような、日頃の活動が重要になります。

月に活動展示二〇一一「伝える」という展示会を開催しました。この展示会は、展示と連動したイベントを多数開催する、参加型の展示会です。展示とイベントを通じて、歴史資料を保存する考え方、その具体的な方法と問題、資料の活用に必要な準備作業、そして資料から歴史情報を取り出す作業を一つ一つ提示し、実践を通じてそのプロセスを紹介しました。また、展示の中では、当館が市民と協力し、地域の文化財「歴史的建造物を再発見し、市民の手で歴史的建造物の活用・保存を活性化しよう」と試みた取り組みも紹介しました。

当館は、文書や民具、古い写真や美術作品など約十萬点の資料を収蔵しています。これらの多くは地域の人々が使



東日本大震災で被害を受けた文化財の保全活動。被災資料を移動した後の収蔵施設。宮城県石巻市、2011年6月。



文化財保全活動で使う道具。活動展示2011「伝える」にて展示。

博物館の活動の中で、企画展や講演会は、資料を収集して保存し、整理・調査・研究する活動の成果を表すもので、最も見えやすい身近な活動といえます。それに対して、成果を出す準備段階の活動は、見えにくい裏側の作業といえます。しかし、歴史資料の保存・活用において、資料を収集し、整理する作業は、資料を選択し、その量的・質的な枠を設けるといふ意味もあわせもつ重要なプロセスです。こうした資料化のプロセスを具体的な内容とともに発信し、地域住民の参加を得て実践する試みとして、当館ではこの一〜二

日頃の歴史を伝える活動と、災害時の歴史資料を保全する活動との双方を視野においた取り組みを続けたいと考えます。

（もり ゆきひと 学芸員）

にいがたの近代建築

— 明治・大正・昭和戦前期の建物 —

小林隆幸

街を彩った近代の建物

江戸時代までの建築と異なる近代以降の建築の大きな特色は、洋風化が浸透してくることです。鎖国に終止符が打たれ、中央集権的な新政府が形成されると、政府は欧米の技術を導入して近代化を進めました。その過程で日本の建築も洋風化してきました。

こうした建築の洋風化は、まず役所や学校から進んでいきました。特に新潟では開港場にもなった旧新潟町を中心に洋風建築がつくられていきました。

最初に登場するのが明治二（一八六九）年に建設された新潟税関庁舎です。現在、重要文化財に指定されている税関庁舎は、外壁にはなまこ壁や漆喰が施され、中央には象徴的な物見の塔屋を備えています。洋風建築としてつくられていますが、建設には伝統的な日本の技術が用いられています。西洋建築の技術者が少ない時代に、日本の大工が西洋建築に似せてつくったもので、擬洋風建築と呼ばれています。洋風建築とは、こうした擬洋風から始まりました。明治六（一八七三）年竣工の新潟郵便役所や明治十三（一八八〇）年に完成した新潟県庁なども擬洋風でした。

また、学校建築の洋風化は、明治八（一八七五）年竣工の新潟学校から始まりました。かつて中央区学校町通一番町に所

在したこの学校は、県内各地から集まった生徒に新しい学問を施しました。洋風の学校は新しい文化が新潟に入ってきた時代を象徴する建物でした。

明治時代後半には本格的に西洋建築を学んだ日本の技術者も増え、新潟の西洋建築も本格化します。明治四十三（一九一〇）年竣工の新潟師範学校は外壁にレンガを施した重厚な木造の建物で、中央に大ドームを備えていました。同年竣工の新潟市役所庁舎は、東京で事務所を構える建築士・三橋四郎が耐火性と外観の美しさに配慮して設計した建物でした。

一方、一般の住宅や町屋と呼ばれる商人や職人の店舗兼用住宅は、これまで通り伝統的な姿を留めていました。伝統的な家並みに、西洋建築が点在していたのです。

大正十二（一九二三）年の関東大震災以降、防火・耐震に優れた鉄筋コンクリート造の建物が普及します。その構造と古代ギリシャ・ローマの建築を模範とする古典主義の意匠が、昭和初期を中心に銀行など企業の店舗に採用されました。昭和



鍵三銀行（大正6年竣工）

二（一九二七）年竣工の第四銀行住吉町支店・沼垂支店、翌三（一九二八）年新築の本店はいずれも鉄筋コンクリート造で、正面の列柱が印象的でした。

消える建物、守られる建物

戦後、都市化とともに都市の郊外化が進み、生活スタイルの変化も伴って街は変貌しました。建物もつくり変えられ、現在の街の建築物のほとんどは戦後のものが占めています。

そして近年、次々に姿を消していく近代建築を惜しむ声も聞かれるようになり、市民を中心とした建物の保存運動も展開されるようになりました。

第四銀行住吉町支店の保存運動は、柳都大橋から続く万代島ルート線の建設に端を発します。道路設計計画で取り壊わし対象になったことで、平成十（一九九八）年から保存運動が本格化しました。市民による保存団体が組織され、署名活動やシンポジウム、関係機関への陳情などの運動が展開されました。そして、建物は第四銀行から新潟市が譲り受ける形で保存され、新潟市歴史博物館の敷地へ移築されました。平成十一（一九九九）年に日本銀行新潟支店長役宅が日銀による資産整理として売却されることになった際にも、市民グループが新潟市での購入を要望する運動

を起こしました。新潟市がこれを買取り、現在「砂丘館」として一般公開されています。

旧新潟県副知事公舎は、平成十六（二〇〇四）年に県の財政再建のため売却されるとの方針が伝えられたことで市民が動きました。県は保存を決定して、平成二十（二〇〇八）年から民間が運営するレストランとして活用されています。

旧斎藤家別邸は戦後所有していた会社の経営難から売却が検討されました。平成十九・二十年に市民を中心に保存運動が行われ、新潟市が購入することで保存されました。

こうした保存された近代建築は、改修工事がなされ新たな機能をもって再生し、市民や県民の財産として活用されています。

本展のねらい

本展では、新潟市の近代に現れた建物を写真で紹介し、また、先に示した市民による建物の保存運動や、保存され再生された建物もあわせて紹介します。本展を通じて新潟市の歴史を近代建築から感じ取っていただくとともに、現存する建物については、歴史遺産としての今後のあり方を考える機会にしていきたいと思えます。

（こばやし たかゆき 学芸員）

常設展示室から

「出山での製塩」(模型)

『新潟市の遺跡と古代の生産』のコーナーに、2人の人物が土器を並べて火にかけている模型があります。この模型は出山遺跡での製塩の様子について、発掘調査記録を基に再現したものです。

出山遺跡は、昭和43（1968）年の新潟東港建設のための水路掘削の際に、海岸砂丘下8mの地点で発見され、翌年に緊急調査が行われました。発掘調査から、土器を使った製塩が行われていたことがわかりました。その時期は、同じく出土した須恵器から8世紀初めころから中ごろと推定されています。

確認された製塩遺構は10か所、1つの遺構の大きさは、長径1mほどの楕円形で、皿状にくぼめられています。それが製塩炉だったようです。炉には壊れた土器片が敷き詰められていました。壊れた土器片は火床に使われたようです。

製塩土器の大きさは、底部の直径が4cm~7cm、口縁部の直径が8cm~14cm、高さ17cm前後と推定されています。形は口がラッパ状に開いたコップのようなものです。加えて、製塩土器を乗せる台がありました。器台、脚台などと呼ばれます。高さ8cm程度で、直径が4cm~6cm、ちょうど製塩土器の底部の直径と同じぐらいで、中空状です。竹輪のような、あるいは、ミシン糸の糸巻きのような形というところと分かります。

出山での製塩の道具は、器台があること、土器が小形あること、口縁部に近づくにつれ、土器が薄くなっていることが特徴です。これは、能登から技術が伝えられたと考えられる、新潟県内の他の遺跡の出土例と異なっており、どこから製塩技術が伝えられたかは現在のところ謎に包まれています。

また、その製塩作業・技法についても多くは明らかではありません。みなとびあでは、2010年に体験講座「塩をつくる」を開催し、参加者とともに出山遺跡の出土例を元に古代の製塩実験を行いました。その詳細については当館の研究紀要第7号に報告しています。実験を通して、器台があるため土器が火を受ける位置が高くなり、製塩土器内の鹹水が沸騰する効率が良くなると感じられました。また、製塩土器が小形であることで土器への熱伝導が効率的になっているのかもしれない。

出山での塩生産はその遺跡の規模から大規模なものであったと考えられます。この地は、海岸砂丘という、塩の元である海水は豊富にありますが、風の影響を受けやすく、燃料となる薪を手に入れにくい立地です。ここで塩を生産していた人々は、限られた資源を効率的に運用する技術を身に付けていたと想像できます。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)



出山製塩遺跡再現模型（奈良・平安時代）

おすすめの1冊

茶の本 (岩波文庫)

ひとりの茶の香から一國の盛衰を、さらには世界の調和美を説いた文明批評。日本美術院をおこし、晩年ポストン美術館に招かれた著者（岡倉天心）が、明治三十九（一九〇六）年アメリカで出した英文原著の和訳です。古今東西を自在に駆け、湧き出る知と情のことは簡明にして的確。厚さわずか五ミリの文庫本。さしずめ手のひらに隠れる一冊の茶室というべきでしょうか。

天心は新潟にきたことがあります。美術院の新潟巡回展を前に、行形亭で講演をしたのです。そこで説いたのは、伝統回帰と革新性。矛盾をあわせ呑む大胆な主張です。もともと、展覧会は不評でした。新旧東西を驚つかみにした横山大観の奇跡的な筆が、ちよつと刺激的すぎたでしょうか。「美術」がまだ新鮮だった、明治三十三（一九〇〇）年のことです。

傑作と通じる心のあり様を、天心は「互譲の精神」と述べます。功罪諸説ある人ですが、巨人には違いありません。まあ、茶でもすすりながら読みませんか。来年、天心が没して百年になります。

（木村一貫 学芸員）



岡倉覚三 著 / 村岡博 訳
岩波書店 2007年改版
（原書『THE BOOK OF TEA』
フォックス・タフィールド社
1906年）

新潟湊の舂下と小廻

伊東 祐之

弘化四(一八四七)年十月二日、一艘の船が次第浜に流れ着きました(『聖籠町史 資料編三近世下』)。船主は新潟町の鶴屋庄吉、乗っていたのは、新潟町の船頭六藏と水主(船員)大松の二人。五〇石積みの船です。九月二十三日に新潟を出帆、佐渡で竹二九八三本と桐一八樽を買い入れ、十月一日に出港しましたが、風に流され、次第浜に乗り上げたのです。船も船具も積荷も無事でした。さて、この五〇石積みの船は、どのような役割の船だったのでしょうか。

天保十四(一八四三)年十月、長岡藩が、上知された新潟町の概況を幕府の新潟奉行へ報告しています(『町方明細帳』)。その中に

- 一 渡海船当所にて所持仕まつり候分 百五十石積より七百石積まで 十艘
 - 一 舂下船 四十六艘
 - 一 天渡船 四十二艘
 - 一 内二十二艘 漁船
- 但し舂下船・天渡船は異国船漂流の節の用船に申し付け置き候
- 一 新潟湊出入り渡海船 去る巳年より寅年迄十か年平均船数 当国船 四百五十九艘 西国船 七十二艘 北国船 千五百三十艘

という記載があります(文書は読み下した。以下同じ)。

「渡海船」は他の湊との間で貨客を運んでいる廻船でしょう。一年間に新潟湊に出入港する廻船は合計で二〇六一艘ですが、新潟湊に所属する「渡海船」はわずか一〇艘で、一五〇石から七〇〇石積みと記されています。鶴屋のような小船は記載されないのでしょうか。

ほかに「舂下船」「天渡船」が記載されています。「舂下船」は「渡海船」と同じベライ型の船です。「舂下船」はどんな役割の船でしょうか。嘉永五(一八五二)年、新潟町が新潟奉行に株仲間について答えています(『新潟市中諸株御尋二付左之通取調書差上候』)。その中に

一 舂下 是は古来より船数四十三艘に取り究めこれあり、御城米船始め諸廻船等水戸口浅く出帆相成りかね候御、浅深二応し積み入れ御米ならびに荷物等舂下仕かまつり御定賃銭取り請け候(中略)私領中元禄年中より享保・寛政の度迄御役場より追々心得方仰せ付けられ候趣申し立て(後略)とあります。舂下は四三艘に決まっています、湊口が浅く荷を積んだまま廻船が出港できない時に、沖まで荷を運ぶ仕事を守っているとあります。それらの定めは

「諸株取調書」という文書の中に「舂下御定書」としてまとめられています。

元禄十五(一七〇二)年の「覚」は、干鰯を他の船が新潟湊へ運んだ際に上前銭を払うという規定と「上荷」の際は申告俵数で運賃を払うという内容で、「惣小廻り中」宛てです。享保五(一七二〇)年の規定では「他所にて干鰯買い調え当所へ積み廻し候節、当湊において小廻し船雇い候節は、舂下仲間の船相雇わせ申すべく候」とあります。享保十七年の「覚」は長岡藩新潟奉行が命じたもので、舂下の大きさに関係なく平均に荷を積むように命じ「船を大きに拵え候所は、面々勝手に寄り近国へ小廻の徳分これある処顯然に候、小船はまれに小廻りに出候ても度数往來も計りがたく、舂下賃を第一の所務と致すの外これなく」と述べ、「他国越年の船」もあると書いてあります。

つまり、新潟湊では「舂下仲間」は「小廻り仲間」とも呼ばれていました。「舂下」は湊口ではしけをして公定の運賃をもらうだけでなく、新潟湊への干鰯輸送の優先権を持ち、「小廻」の稼ぎをしていたことが分かります。

では「小廻」とは何でしょうか。他の湊では小さな廻船をいいます。湊によって一〇〇石積み以下であったり、五〇石積み以下であったりします。「小廻」の稼ぎは「諸国より諸廻船人津仕かまつり候

節、右船々買米・大豆・干鰯之類、椎谷・柏崎・宮川・寺泊・西浜右浦々より運賃にて積廻し(『出雲崎・天明三』)平日今町湊・柏崎町・荒浜浦其外近浦々ならびに佐州表へ商荷又は運賃荷等積み送り渡世(『尼瀬・慶応四』)などと資料に書いてあります。つまり、大きな湊の廻船の荷を、近隣へ運び売ったり、集めたりしていたということです。

次第浜に流れ着いた鶴屋の船は「小廻」の稼ぎをしていた「舂下」でしょう。「舂下」は「小廻」は、河口の浅瀬という新潟湊の弱点を補うだけでなく、拠点港新潟と地域港との間の物流を担っています。全国市場と地域市場との結節点新潟湊を支える重要な役割を果たしていた船だったのです。

(いとう すけゆき 副館長)



新潟湊の小型ベサイ船

独楽遊び

「宙を引く 紐の先より 独楽 飛びぬ」采花(句集「独楽」一九九五)

塚田采花先生五十歳の句です。冒頭は、宇宙の「宙」で、空中・空間を意味します。

独楽を巻いた紐の端を握り、三次元空間の「宙」を睨み、その虚空を思い描いて、「えい、や！」と気合を入れて投げ引くと、紐の先から独楽が思ったところに飛んで、一瞬、ぱつちりとその場所にあるという、独楽遊びの醍醐味を生きた生きた切り取った一句になっていますねえ。

「句評」は、「見事な活写である。この上に加える一文字もない。」とあり、一文字で苦心するプロの批評は極上ものです。私は、この句が作者の「独楽遊び」の高い境地から生まれたものであることに心魅かれたのでした。

さて、平安末期に後白河法皇が選んだという「梁塵秘抄」の今様には、「いざれこまつぶり、鳥羽の城南宮の祭り見」という歌があります。その意味を国文学者の西郷信綱さんは、「さあ行く、こまよ、祭りの見物に」と、「かたつむり」の様な格好をした、そんな



幕繪独楽回し

愛用の「こま」に声をかけていると解釈しています(『梁塵秘抄』75頁ちくま文庫)。

このように平安時代以来の伝統の「独楽遊び」は、凧揚げと並ぶ男の子の遊びでした。うまくいっても失敗しても、夢中になって遊ぶ子供が、この「えい、や！」を積み重ねて後に大人となり、冒頭の秀句を読むに及んだのでした。

この例は、子供の遊びが広く日本の伝統文化の大切な基盤になっていることを示して余りありません。当博物館の広い体験の広場やまた体験イベントの意義も長い眼や広い視野から理解できるものと言えましょう。

収蔵資料紹介

乍恐以書付奉歎願候

(大野地村庄屋久兵衛次男政治帰郷願ひ)

本資料は「明治二己年七月十九日」付の歎願書です。差出人は「御管内蒲原郡大野地村庄屋久兵衛代親類久藏」です。「右村(大野地村)百姓代武兵衛」が奥印をあたえて「水原民政御役所」へ願ひ出ています。

二日前の明治二(一八六九)年七月十七日、大野地村(現阿賀野市・旧水原町)庄屋・久兵衛の次男・政治(当時十五歳)が、家から居なくなりまして。久兵衛と親類の久藏は、すぐに捜しまわりましたが、政治のゆくえは一向に分かりません。そこへ、政治が近郷の神職の次男・鈴木椿平という人物の世話を受けて「金革隊」へ入隊したという報せが入りました。

「金革隊」は、慶應四(一八六八)年五月に俵柳村(現江南区)出身の小林政司が弟の小林六兵衛らと共に組織した草莽隊です。戊辰戦争に参加し、長州干城隊に属して越後各地を転戦・警衛しました。「金革隊日誌」によれば、隊は明治二年五月二十日には、越後府軍務方の命令で、当時中条にあった本隊のうち一小隊を「水原府守衛」のために分遣していました。六月中旬には同じく越後の草莽隊である居之隊と合兵し「御紋附中隊旗」を受領します。



政治の金革隊入隊の報らせを聞いた久藏は、さっそく世話人の椿平と共に、隊へ掛け合いに行きます。久藏は「政治義勇親得心も無之、風と家出いたし候者故、何卒元形帰村為致もらひ度」と政治の帰村を頼みこみます。しかし隊は「一旦入隊いたし候上者、如何様頼入候而も相返し不申」と帰村を頑として認めませんでした。久兵衛と久藏は「不案増難渋当惑」し、自分たちの手では政治を取り戻せないと考えました。

このいきさつを記し、水原民政局へ政治の「元形帰村」を歎願したものが、本資料「乍恐以書付奉歎願候」です。この歎願書は草莽隊がもたらした若者への影響や、入隊者の帰村をめぐる隊の対応を知ることができる興味深い資料です。

(安宅 俊介 学芸員)